

『カネタツ』マークと私との絆

中村 勇吉

本年一月二十一日、生田神社会館で、金子直吉翁二十年祭がしめやかに営まれた。正面に翁の胸像が置かれ、その右側に何時もの通り懐かしい「カネタツ」の暖簾が吊られて居た。其時金子翁と此のマークとの永い年月の連繫を思い私の胸を強く打つものがあつた。

と申すのは、鈴木ブランド薄荷腦、薄荷油のラベルの「カネタツ」マークが其の製品と共に明治卅六年以来現在まで約七十年間、内外津々浦々に知れ渡り続けて居る事実であり、私の社会生活が直接、間接に此の「カネタツ」マークと切り離せない関係にあつたからである。



出農産物に指定の樟腦、除虫菊、寒天、木蠟、蕃椒等々の商品を直接消費者に亦仲買人の手を経て、北米、Canada, Cuba 等諸国への売込みに東奔西走を続けた。

其の多数の取引先の中で私の最も親しく取引出来得た御得意はマケッサン・エンド・ロビンズ株式会社 (Mekesson & Robbins, Inc.) で、現在 New York) であつた。此の社は当時紐育に支社。其の近くの Bridgeport 市に本社と工場が在り、マケッサン (McK & R) マークの医薬品、化粧品、化学薬品、等の製造販売会社で、其等製品の米国内販売店が二万軒以上にも達して居た。現在も一流会社として活躍を続けて居る。此の社との取引数量も漸次増し、遂に鈴木紐育支店第一の御得意と成り、特に「カネタツ」薄荷の買附量も第一位と成つた。斯くして居る裡に、マ社の社長コスター氏 (E.D. Coster) と私との友情は深まり、御得意様と云ふよりは、私の兄貴の様な感じであつた。パーティに度々招かれた。当時は米国は禁酒法発令中ではあるが、家庭内での飲酒は許されて居るので、招かれる日が待ち切れなかつた。亦ゴルフにも度々誘われた。自家用大

其の思い出を此処に書かせて戴きます。

曾って金子翁が鈴木商店に入店され、製造販売事業を始められた主要商品は「カネタツ」薄荷腦、油と樟腦、油であつた事は誰も御承知の通りである。

私は大正六年、関西学院高商部を卒業。直に鈴木商店本社に入社。倉庫部に於て、金子、松方両翁御発案の日本船鉄交換での輸入鉄材荷受関係事務を担当した。是れが私の社会生活の第一歩であつた。日々本社と兵庫の川崎造船所をお抱えの「カネタツ」の人力車で往復して居たのも懐しい思い出である。

翌大正七年五月、突然の朗報。それはシヤトル支店へ転勤を命ぜられた事だ。学生時代の唯一の希望であつた憧れの海外、然もアメリカ生活と云う好機を得た喜び。出発前に、御家様に亦西川 (文) 氏に感謝の気持ち一杯で御別れの御挨拶をした事を記憶して居る。それと相前後して、

ヨットで近海を楽しく航行した事もあつた。斯様な順調な取引進展の最中に第二のショック。それは昭和二年四月鈴木商店整理と云う大悲報である。内地でならいざ知らず、地球の裏側に居てのこの悲報。一同の心境察するに余り有つた。私も同僚と共に本社に打電。「近い裡に帰国する故、職場の御推薦方願う。」と。亦それと同時に「カネタツ」の薄荷事業は必ず再建する故、其の際にはよろしくと御得意先廻りをしたものだ。

暫らくして本社よりの返電は「残念乍ら、現在内地は不況のどん底故出来れば、そちらで職を見つけて貰いたい。」との事だつた。私の沈痛なる顔を見た同僚社員二人。其の二人は米国婦人と結婚。平和な家庭生活を楽しんで居られる方々で、私に「君も滞米早や十年近く、内地へ帰らず私達同様に米国美人をもらつて、余生を米国で過しては、仕事は何でも有る。」と。本気で親切に勧めてくれた事もあつた。其の時私は将来に閑色々と深刻に考慮を続けて居る裡に、フト胸に閃いた事を早速実行に移した。それは前述のマ社のコスター社長即私の兄貴分を Bridgeport の本社社長室

薄荷、樟腦部長であつた楠瀬 (正) 氏から特別の御要望があつた。それは「カネタツ」の薄荷腦、油は当時内地の市場は充か把握出来て居るが、海外、殊に世界最大の北米市場との直取引が無い故、是非此の好機会に特別の努力を、との申出であつた。此の時に私と「カネタツ」薄荷との堅い縁が結ばれた様に思う。

二週間と云う永い日数の船旅を過して、漸く赴任先のシヤトルに到着。 Colman Bldg. 四階で勝屋 (利) 氏の下で事務をとらせて貰つた。昼は会社、夜は当分週二回づつ米人宅で英会話の勉強と云う生活。当時の事務は満洲地方から石油缶入の大豆の輸入と、鉄鋼、銅、ホップ等の輸出であつた。

間もなく受けたショック。それは大正七年八月十二日の本社が米騒動で焼き打ちを喰つたと云う思い掛けない知らせであつた。是れは在米中の第一の衝撃であつた。出発時の楠瀬 (正) 氏の御要望を何とか実現したいと努力はしたが、残念ながらシヤトルにも亦西海岸の何れの都市にも薄荷腦、油の業者が無い故遺憾。一日も早く東海岸の取引中心市場の紐育への転勤を望んで居た。シヤトル在勤中は勝屋 (利)、落合 (豊)、助

に訪ねた。そして事の一部始終を詳細に報告して、今後の私の身の振り方につき真剣に相談を持ちかけた。それから三日目に社長から電話で直に本社社長室を言われた。

私を待ちかねて居られたコ社長は私の右手をシッカリ握つて、ニッコリと笑顔で申された。「君の今の然も外地に於けるショックを受けた心境は良く解る。自分の事として、君の立場を深く同情して将来の事について考慮して見た。それで、君、当社に入社して、吾社の東洋方面の出張所は現在上海に在るが、其の監督をも兼ねて、神戸市内にマ社支社を開設して、東洋総支配人として同地方の責任者と成ると同時に一方日本内地生産重要輸出品物の買付けと、他方マ社製品の医薬品、化粧品、化学薬品の輸入販売の仕事をやつてはどうか。亦近い裡に技術者を派遣する故マ社の工場を内地に建設の件も良く研究して貰いたい。君の給料は当分年間六千弗」と。其の瞬間の喜び。コ社長の顔が御家様に見えた。誰が No. 1 Thank You. と申せよう。余りにも思い掛

け無い他国の人の国境を越えた友情に、人の情に感激の涙に暮れた事。

野 (俊)、益子 (四)、諸氏と共に、仕事以外にテニス、ゴルフ、ポーカー、登山、ドライブ等々楽しい日々を過した事は未だ印象に残つて居る。

此の間、二年足らず。大正九年二月に予てからの大願であつた紐育支店勤務の辞令が出た。翌三月に各関係先への紹介状を持参してシヤトルを出発。汽車で Portland, San Francisco, Los Angeles, El Paso, New Orleans, St. Louis, Chicago, Pittsburgh, 等々の都市を過つて約二週間後 New York へ到着。当時は米国政府が排日政策実施中の為、其の途中に一流ホテル、料理店、理髪店、等度々排斥を喰つた不快な思い出もあつた。

紐育支店では北浜 (留) 氏の下で輸出入部を開設担当した。此の支店は Woolworth Bldg. 近く Colman Bldg. 十三階に在つた。

此の地は薄荷腦、樟腦、の世界最大の取引市場である。此の地では是等商品以外の輸出入商品の取引に關し色々の変つた経験や思い出も多々あるが、此度は主題の通り「カネタツ」の薄荷のみの思い出を書かせて頂きます。

此の地に転任以来、昭和二年迄の八年間、薄荷腦其他当時日本重要輸出生産物に指定の樟腦、除虫菊、寒天、木蠟、蕃椒等々の商品を直接消費者に亦仲買人の手を経て、北米、Canada, Cuba 等諸国への売込みに東奔西走を続けた。

一生涯忘れられない。早速六月にマ社へ正式入社。紐育から本社工場へ通勤。マ社取締役のハーマン氏 (C.G. Herman) とコ社長の隣室で机を並べて私用タイピストを与えられて約二ヶ月間、日米取引事務の打合せをした。昭和二年八月、Canada を陸上通過 Vancouver を出港して、渡米後十年目に懐しの神戸港へ晴れて親友や両親等の暖かい迎へを受けたわけだ。早速、商船ビル七階にマ社事務所開設。Representative, Mekesson & Robbins, Inc., New York の看板を掛けた。鈴木商店紐育支店に在りあつた藤岡 (一) 氏、中国人の陳氏、亦当時整理中の英国商社支店長のダニエル氏 (G.S. Daniel) 其の他「一、三名を集めて直に輸出入事業に入つた。其の時に嬉しかつた事は、昭和二年六月に過に鈴木商店薄荷、樟腦部 (明治三十六年創業) が鈴木 (岩) 氏、高畑会長、金子 (直) 翁氏等を主体とし、楠瀬 (正) 氏が社長に「カネタツ」薄荷製造事業が鈴木薄荷合資会社の名の下に再建されて居た事であつた。其の年の末に、コ社長と相談の結果、ロンドンへ子会社の Mekesson

& Robbins, Ltd. を設立。ダ氏に帰国、社長に就任して貰った。今度私がコ社長の立場と成つて、ダ氏からの感謝の別れの涙を貰った事だ。其の際特に何を置いても、薄荷、油を共に歐洲市場全般に拡充を打合せた。

話は前記マ神戸支社開設時に戻るが、鈴木商店本社（海運通）に帰朝と御札の御挨拶に参上の際、永井（幸）氏に面接。支社開設の報告を申し上げた時、日商と合併しては、との御提案があつたので、早速コ社長に打電して相談したが、予定通り運営してほしいとの返答で此の話は成功しなかつた。

爾來昭和十四年二月まで約十二年間マ本社よりの入注の、薄荷を始め、各種重要輸出農産物の買付輸出とマ社製品輸入販売に努力を続けた。

亦他方製造工場の建設計画も今一步と云う所まで近づきつつあつた。当時は吾国政府の重大政策の一つの金獲得時代で、農産物系である薄荷、樟脳、除虫菊、寒天、木蠟、蕃椒等が現在では想像さえも出来ぬ程重要商品に属し、各業者の輸出実績に基き、輸出許可量が決定されると申す様な時代に成つて居た。

幸にもマ社は永年の努力が業績に現われて前記商品中殆んどが第一位を獲得して居た。そして活潑な輸出事業を続けて居た。其の間、楠瀬（正）氏も御来社。薄荷、油、等優先的に購入して居た。此の事實は関係者は良く知つて居られる。亦他方三井物産も度々来社、薄荷、油や樟脳を強引に売込みに来たもの

ところが、遺憾ながら昭和十四年二月、世界大戦が勃発。そして我が軍が Hawaii 爆撃の約二ヶ月前に突如マ本社から駐日支社一時閉鎖の命を受けた。コ社長から誠に丁寧な便りで一時間閉鎖を納得の行く説明と同時に、神戸支社の諸設備並に事務用品と輸出実績を全部私に贈与する故出来れば、世界平時にマ社再開を期して、現在の事務所を其のままとして、表の看板を中村勇吉商店と掛け替えて、贈与した輸出実績を利用。事業を継続しては如何と指令を受けた。

直ちに新社名で交戦国以外の各国との貿易事業に入つた。其の頃、話には横に入るが、私は仕事の関係で常に米、英国、其の他諸外国との取引の関係上、其等諸国の領事館へ始終出入した。亦外人との交流も深か

つたためか、突然憲兵隊から呼び出しを受け、深川駐屯所でスパイの容疑で徹夜の尋問を受けた。勿論神戸地方裁判所の判決は無罪放免。其の判決直後判事は、私にこんな事に懲りず、今後共諸外国との貿易を御国の為めに願う。と誠に矛盾した話と憤慨したものだ。

其の年の八月、楠瀬（正）氏が来社。突然に「金子（直）氏の御要望ですが、薄荷、油共他を世界各国に直輸出に努力したいので、君現在所有の輸出実績と共に鈴木薄荷株式会社を合併して呉れませんか。条件は後に。」との要請があつた。余りにも突然で意外の申入れであつた。暫らく考慮の結果、合併条件は後廻しとして、申し入れを受諾。同社に合併、取締役支配人の地位を貰つて、中村商店の看板を下して、私の使用して居た機等一切（現在机は下河通の鈴木薄荷株式会社の応接室で使用）亦必要書類等と共に栄町三丁目の事務所へ移入した。当時二階には金子（直）氏の事務所も在つた。

其の後漸らくして世界戦争拡大に伴い企業整備法が発令された。昭和十六年四月、吾国薄荷製造業者に整備統合が下命。薄荷工場と

間も無く米進駐軍の上陸と同時に明海ビル接収と成り、本社を明け渡して、武庫郡本庄村西青木の日本金属化学研究所工場へ移入した。

其の頃から農林省の督励で前記主要産地以外の各農地に薄荷原油の生産に努力の結果、其の原油の生産もボツ／＼と向上して来た。

其の間資材不足の中から極く小規模の薄荷製造工場の造作に入つたが遺憾乍ら、原料油入手が仲々に困難であつた。

私は会社の運営上少しでも資力必要に迫られ、色々と思案の結果。当時は物質極度に不足時代故、紙袋入の粉歯磨を製造、亦是れに加えて近くの日本樟脳株式会社製造の缶入靴磨等を京阪神の百貨店、其の他に売り歩き、一日も早く薄荷の製造販売を軌道に乗せんと切望して日々東奔西走を続けたものだ。

昭和二十二年八月、企業整備法が解除されて、貿易再開とも成り、会社の業績も漸く向上し始めた。其の時に明海ビルで助かった私の貴重な海外通信書類が非常に役立った。

昭和二十二年十一月、高畑会長の格別の御配慮、御指示に依り現在の本社（元、日輪ビル）へ移入の好機会を得た。そしてビルの地階と一階

を工場に亦当時太陽鋳工株式会社事務所であつた三階の片隅を拝借して漸く仕事軌道に乗り始めた。昭和二十六年十二月、其の土地約四六〇坪とビル約二五〇坪の全部譲渡を受けるまで成績は上つた。地階、一階、二階を工場に、そして三階を事務所に、工場の設備能力も磯上通時代の其れに稍近いものが備り、本物の薄荷製造工場、薄荷油の内地、輸出向共の製造の軌道に乗り始めた。

斯くして昭和二十九年八月、資本金一千万円に増資。鈴木家直属残存事業の一つとして漸く廻り薄荷の面目を施し得るまでに回復。亦会社の業績も次第に上昇の道を辿つた。ところが、昭和三十五年二月三日、自他共に許す吾国薄荷業界の元老、楠瀬（正）社長の急逝と云う甚だ遺憾な事の勃発であつた。其の月の十三日に当時専務取締役で居た私に後継者の指令を受けた。

扱て世界戦争開始までは、世界薄荷市場を牛耳つて居た、日本の薄荷も英文代名詞で S. K. N. Y. T. (スキント) と称せられ、S (Suzuki) マークは世界第一位と認められて居たが、前述の通り戦争が永引くに従い薄荷烟が食糧油に転化された結果原油の

生産が極度の減産を齎した。

其れに反し他方 Hawaii の急増産に伴い且つての我国海外の得意市場を漸次侵食され非常に困難な時期に入つた。

そこで、此の減産を受けた薄荷の欧米市場を全部とは申さずとも幾分か取戻す為めには内地の原油増産は勿論の事であるが安価な原油の多量入手可能な Brazil に進出し、其の地に工場を設置、其の地の原油を利用。世界市場に品質を誇りとする薄荷製造工場、油を製造して製品を過去の御得意に輸出する手以外に当面他に無しと断言して、早速 N 総合商社に詳細計画書を提出して、指示を仰いだ。余り興味は無きさうで実現に至らなかつたのは残念だつた。その直後、業界一、二を争う会社が、吾国有力総合商社と提携して、同地に薄荷工場を建設して現在も活躍を続けて居る。

其の後、台湾に優良薄荷製造会社が見附かり、早速渡台して工場設備製品等を調査の結果、同社と提携して薄荷製造をして輸出した事もあつた。

昭和三十六年九月、京城に在る韓一流商社よりの申し出で、同社近辺に生産の原油を利用して、製造事

北海道北連（北見市）の二工場に於てのみ製造を許可、他社の工場は全部閉鎖となつた。戦争参加国の加増に伴い、欧米への薄荷、其の他農産物の販路は次第に狭まつた。斯くして市場は主として東洋と其の近辺と云う限界に達し、其の上に食糧不足に伴い主要産地である北海道北見地方、亦本土の岡山、広島各県に於ける薄荷烟が順次食糧油に転換に向い、薄荷原油の生産が次第に減少に向い、ざるを得なく成つて来た。其の苦しい状態に入りつつある間に、世界最大の消費国である北米市場も Brazil に依存せざるを得なく成つて、世界最大供給国であつた日本は泣かざるを得ない立場に成つて来た。

昭和十九年三月、栄町事務所を明海ビル五階に移転。翌二十年三月、神戸市第一回の米軍の空襲に合い甚だ遺憾ながら大切な薄荷工場が被爆全焼した。亦重ねて六月の第二回目の空襲で明海ビルも被爆火災に遭つたが、幸いな事には、本社事務所の五階だけが被害を免れた。其の為め貿易再開の際に絶対必要な対外通信書類が助かつた事は不幸中の幸であつた。亦時を同じくして山手の熊内の自宅も全焼した。同年八月十五日ポツダム宣言受諾。終戦玉音放送。

業に入りた故、技術の指導を。と突然の申入れに早速其の依頼を承諾して製造技術の指導に当り、翌昭和三十七年二月に指導を終えた。

其の指導の終了直前に同社社長から、同社製品販売に関連して、欧米市場の実地見学の要もある事故、私に差支え無ければ欧米市場実地見学の案内役になつて呉れぬかとの依頼を受けた。

吾社の薄荷の永年の取引先にも亦旧友にも久し振りに面接出来、我が社としても将来の取引に一層の参考とも成る事故、同社の提案を入れて、二月十七日に同社社長と二人連れで羽田を出発した。

桑港を過つて紐育に到着。同地を中心に約二週間取引先、友人等の訪問で送つた。時には私個人で Greensboro に在る Vicks の工場や薄荷煙草の中心地の Richmond 等廻つた。其の結果として二人連れで訪問した先々では皆薄荷の品質の優秀を確認して呉れた事は誠に嬉しかった。若し Brazil 産と同値又は其れに近ければ勿論薄荷と、総合結論を得たものの、当時から値段に相当の開きが始めた。然し Brazil 産薄荷とは申せ安価で多量な薄荷を現在の様に未来永久的に供給が出来

